

平成 18 年度 紀要 第 43 号 - 1

「確かな学力」と「豊かな心」をはぐくむ
新しい学校教育の創造

英語教員の資質向上を図るための
効果的な研修の在り方について

- 英語教員指導力向上研修より -

高知県教育センター

英語教員の資質向上を図るための効果的な研修の在り方について

- 英語教員の指導力向上研修より -

もくじ

1	はじめに	1
2	研修の特徴	2
3	目指す英語教員像	2
4	達成目標	3
5	研修のアウトライン	3
6	授業改善プロジェクトの実施(4月～12月)	3
7	事前研修課題	4
8	オリエンテーション	4
9	夏期集中研修	5
10	報告会	5
11	受講者の変容	5
12	最終年度に向けて	10
13	5年間の成果として	10

資料 英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」

Action Research Navigator	11
---------------------------	----

英語教員の資質向上を図るための

効果的な研修の在り方について

- 英語教員指導力向上研修より -

教職研修部 年次研修担当 指導主事 山中 由香

平成15年度から高知県教育センター主管で実施している「英語教員指導力向上研修」では、英語教員の資質向上を目指して、従来の与えられるだけの研修から、受講者自らが課題を発見し、解決していく受講者主導型の研修内容としている。研修期間は約8ヶ月に渡り、集合研修だけでなく、在籍校においてアクション・リサーチの手法を取り入れた授業改善プロジェクトに取り組んでいる。自分の授業を見つめ直し、生徒の願いを率直に受け止めることで、英語教員としての意識改革や、授業改善への意欲につながる効果が期待できる。

キーワード：授業改善プロジェクト、アクション・リサーチ、OJT、英語教員

1 はじめに

平成18年3月31日、文部科学省から「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」が公表された。経済・社会のグローバル化が急速に発展し、国際社会を生きる広い視野と、国際的な理解と協調が不可欠な現代社会において英語は、母語の異なる人々の国際共通語として最も中心的な役割を果たしており、21世紀を担う子どもたちに英語のコミュニケーション力を身に付けさせることは、重要な課題である。その一方で、現代の日本人は英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受けたり、正当な評価をされなかったりするなどの場面が多くみられる。このような課題を解決すべく、行動計画に基づき、高知県でも平成15年度から19年度までの5ヶ年計画で、英語教員の資質向上を図るため、「英語教員指導力向上研修」を実施している。受講対象者は高知県内の公立中学校、県立学校の英語教員約400名である。

年 度	対象地区	会 場	受講者数
15	中央地区	高知市内	81名
16	東部地区	安芸市内	48名
17	西部地区	四万十市内	50名
18	中央地区	高知市内	98名
19	中央地区	高知市内	120名(予定)

集合研修では、英語教授法、実技等、教育界内外の講師による専門性を高める内容を精選し、在籍校研修ではアクション・リサーチの手法を取り入れた自己研修を行い、1年間のまとめとして、研修報告書を作成する。5日間連続の夏期集中研修など、受講者にとっては、精神的にも体力的にもややハードな研修ではあるが、最終的にはほぼ全員の受講者が充実感

を持って研修を終了している。

2 研修の特徴

与えられる研修ではなく、受講者自らが課題に取り組む、自己研修能力の開発を重視している。受講対象者の年齢層は20代～50代までと幅広く、中高合同で研修に参加することで、校種や学校規模が異なる学校の英語教員と交流することにより、刺激を受け、意欲的に研修に臨む姿が見られる。

本研修終了後も、自己研修に努めることができる自立した英語教師(self-directed teacher)の育成を重要目標としている。

現場教員の自己成長にはOJT (on the job training) が不可欠であるので、集中研修だけでなく、継続的な所属校研修を取り入れている。OJT では、アクション・リサーチの手法を取り入れた所属校研修を実施。アクション・リサーチの専門家とアドバイザー約を結び、メーリングリストを通じて指導・助言を行っている。

アクション・リサーチとポートフォリオを組み合わせ、継続的な自己研修を促すようにしている。アクション・リサーチによる授業改善プロジェクトの実施することにより、自分の授業を見つめ直し、生徒の願いを真摯に受け止める意識が芽生えている。

受講者のメールアドレスをまとめたメーリングリストを作成し、情報交換の場としている。各所課の英語担当指導主事が3～4グループ(各グループ3名程度)の受講者を担当し、メールや電話で研修中の悩みや、研修報告書の作成について相談に乗り、きめ細かく関わるようにしている。年間を通じてのプログラムは、集合研修だけの場合より主催者の負担が大きい、誠意ある温かい支援を続けることが、一人一人の受講者の教職への熱意を高めている。

CASEC (Computerized Assessment System for English Communication コミュニケーション自己診断テスト)を夏期集中研修1日目にPCで一斉受験。12月1日～翌年2月28日の間に、オンラインで再度受験。計2回。受講者は受験報告書を提出する。

CASEC: 英語検定や、日本人が国内向けに企画した標準テスト TOEIC (Test for English International Communication)、外国語としての英語能力テスト TOEFL (Test of English as a Foreign Language)での目安としての点数が示されるもの。資格試験ではないが、受講者は自分の英語力について具体的な目安がつくので、自己研鑽を積んで2回目受験に臨んでいる。

受講者が作成した授業改善プロジェクト報告書を冊子にして、毎年全英語教員に配付、Web サイトでも公開することにより、過去の研究から自分の課題に共通した研究を参考にできるなど、有効性が高い。

3 目指す英語教師像

良質の英語を使った授業を展開することができ(real English teacher)、省察によって授業を改善する方法を身に付け(Reflective Practitioner)、新しい英語教育の創造に自ら積極的にコミットする英語教員(self-directed teacher)

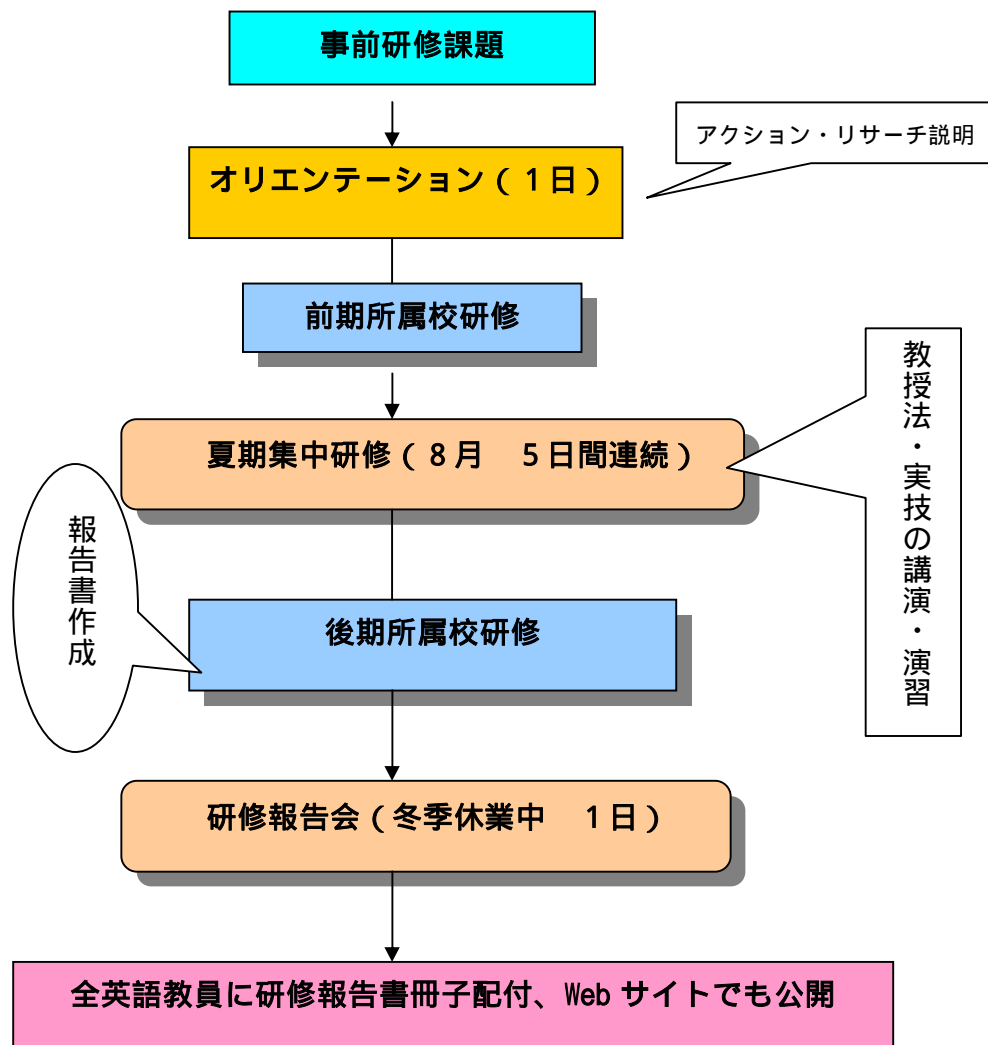
4 達成目標

英語コミュニケーション能力の向上（現状の把握と実践的コミュニケーション能力の向上）

英語教育における指導力の向上（授業実践力と教科教育の専門性の向上）

自己研修能力の育成と OJT の定着（アクション・リサーチによる授業改善の手法の習得）

5 研修のアウトライン



6 授業改善プロジェクトの実施（４月～１２月）

アクション・リサーチによる授業改善プロジェクト

アクション・リサーチとは、教師が授業を進めながら、生徒や同僚の力も借りて、自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことによって、次第に授業を改善していく小規模で系統的な実践研究の方法である。本研修では、受講者が所属校でアクション・リサーチの手法を取り入れた授業改善プロジェクトに取り組むことにしている。また、アク

ション・リサーチナビゲーター（別添資料）を配付し、受講者自らが研究を深めていくことができるようにしている。

メールリングリストの活用

受講者のメールアドレスを登録したメールリングリストを作成し、教育センター及び高等学校課から情報を発信している。年間アドバイザーの横浜国立大学名誉教授 佐野正之先生からも「佐野先生のミニ・レクチャー」が配信され、受講者に的確な示唆と励ましをいただいている。

メンタリングシステム

少人数のグループ分けをして、英語担当指導主事が「メンター」として受講者と連絡を取りあう「メンタリング」のシステムを採用。メールや電話で受講者と連絡を取り合い、仮説の検証や、報告書の作成などのサポートを行なっている。所属校が広域に渡り、英語科教員が一人という環境の受講者もあり、メンターに相談することによって悩みが解消されたり、課題の方向性が明らかになるなど効果的である。

ティーチング・ポートフォリオ

オリエンテーションの際に、各自の氏名入りのファイルを配付している。受講者は研修中、作成したワークシートや生徒からの授業評価、生徒の作品などを綴じて、ティーチング・ポートフォリオを作成する。受講者にとって、より深く継続的な内省が可能になり、自己成長の喜びを実感できる。生徒や保護者への説明責任の証拠ともなっている。

受講者はインデックスをつけるなどの工夫をして、研修の成果をファイリングして、夏期集中研修で1回目の提出をしてチェックを受ける。その後、実施したアクション・リサーチに関連する資料などを綴じて、報告会で再度提出をしてチェックを受けることにしている。

7 事前研修課題

本研修では、3つの事前研修課題（別添資料 P.10～14）を受講者に求めている。受講者はそれぞれの課題に必要な事項を記入して、オリエンテーションに持参する。受講者にとっては、これからの研修にあたっての心構えともなり、グループ協議の際、情報交換の貴重な資料となる。

事前研修課題1では、英語運用能力についての自己評価、事前研修課題2では、自分の授業実践を振り返り、アクション・リサーチを始めるにあたっての準備をする。事前研修課題3「授業改善プロジェクト 英語授業力自己評価票」は、同じものを報告会終了後にも配付して、研修前と研修後の受講者の変容を追うことができるようにしている。

8 オリエンテーション

約8ヶ月に渡るこの研修の開講式。年間アドバイザーである横浜国立大学名誉教授 佐野正之先生による講演も含め、アクション・リサーチの説明を行っている。受講者は各グループにわかれて協議、情報交換を行う。

その後8月の夏期集中研修までに、自分の担当クラスの予備調査などを行い、授業の課題の洗い出しをして、リサーチ・クエスチョンを設定することになる。

9 夏期集中研修

研修初日のプログラムでは、毎年（株）アイ・シー・シー代表 千田潤一氏による特別講演があり、「英語を教えるプロ」としての自覚を促している。講演の内容に衝撃を受け、発奮する受講者も多い。午後は授業改善プロジェクトと CASEC 受験が同時進行で 2 コマ実施される。受講者は自己の英語運用能力を知ることとなり、ここでも「英語を教えるプロ」として、再度自分を見つめ直すことになる。また授業改善プロジェクトでは、グループ協議が行われ、春のオリエンテーションからの取組について話し合われる。授業改善プロジェクトは 2 日目をのぞいて毎日 1 時間程度設定されており、一日一人の割合で発表し合い、協議を行うことにしている。

2 日目の午前は教授法の講演、2 日目の午後と 3 日目の午前は、同時通訳法の実技演習を行う。これは、2 学期に学校で実践できる手法として毎年好評である。3 日目午後と 4 日目午前は評価とテストについての講演・演習。4 日目午後と 5 日目午前は英語ディベートを体験する。2 日に渡る講演や演習を設定した意図は、研修内容を自宅でゆっくりと考えてもらうことで、次の日の内容がよりわかりやすく、受け止めやすくなり効果が高いからである。5 日目の午後は、授業改善プロジェクトの中間まとめということで、2 学期または後期からの授業の中で実施するアクション・リサーチについての最終的な準備として、リサーチ・クエスチョンを確定する。

10 報告会

17 年度の中間報告で実施したポスターセッションを、18 年度は報告会で実施した。受講者は自己の所属校での取組について、資料などを工夫してプレゼンテーションを行った。発表することで、研究のまとめが整理され、プレゼンテーション能力の向上にもつながった。



11 受講者の変容

オリエンテーション前と報告会の後に実施する「授業改善プロジェクト英語授業力自己評価」では、下記の表のように「教育的人間力」、「英語運用能力」、「英語教授力」の 3 つの領域に分けて、それぞれに項目を設定し、受講者は 4 段階で自己評価をする。研修前と研修後では、受講者が授業改善に真摯に取り組んだ結果が現れている。

平成15年度～17年度 全体の傾向

成果

- ・ 英語を教えることを喜びとし、生徒の良好な人間関係を築きながら、授業に対する深い洞察をもとうとする「教育的人間力」を高めることに効果があった。
- ・ 受講者の多くが、授業改善という点については、研修の成果を実感している。
- ・ 特に、生徒理解に関する項目で効果が顕著である。
- ・ 授業改善に取り組み、プロジェクトを完成させることが、達成感に通じている。
- ・ 職場内で同僚がアクション・リサーチを行うことは、授業改善に対する意識の改善に寄与する。
- ・ 英語運用能力の向上については、研修期間内では十分な向上が見られなかったが、生涯に渡って英語力の向上に努めるという意欲を高めることができていた。

課題

- ・ 教科教育に関する専門的知識の向上は、引き続きの課題である。
- ・ 望ましい変化のとらえ方、授業中の英語使用などの意識の点において、高校教員が、中学校教員に比べて十分でない。自己評価の基準が厳しいのか、成果が上がっていないのか、検証する必要がある。

平成15年度			設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	3.19	2.95	3.07	2.98
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.10	3.03	3.06	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.12	3.00	3.06	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	2.90	2.92	2.91	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.76	2.82	2.79	
2 英語運用能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.31	2.26	<u>2.28</u>	2.67
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.57	2.44	<u>2.51</u>	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.71	2.72	2.72	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.69	3.03	2.85	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.02	3.00	3.01	
3 英語教授力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	2.98	2.90	2.94	2.77
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。	2.76	2.77	2.77	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。	2.86	2.95	2.90	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.44	<u>2.41</u>	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.83	2.85	2.84	
平 均			2.81	2.80	2.81	

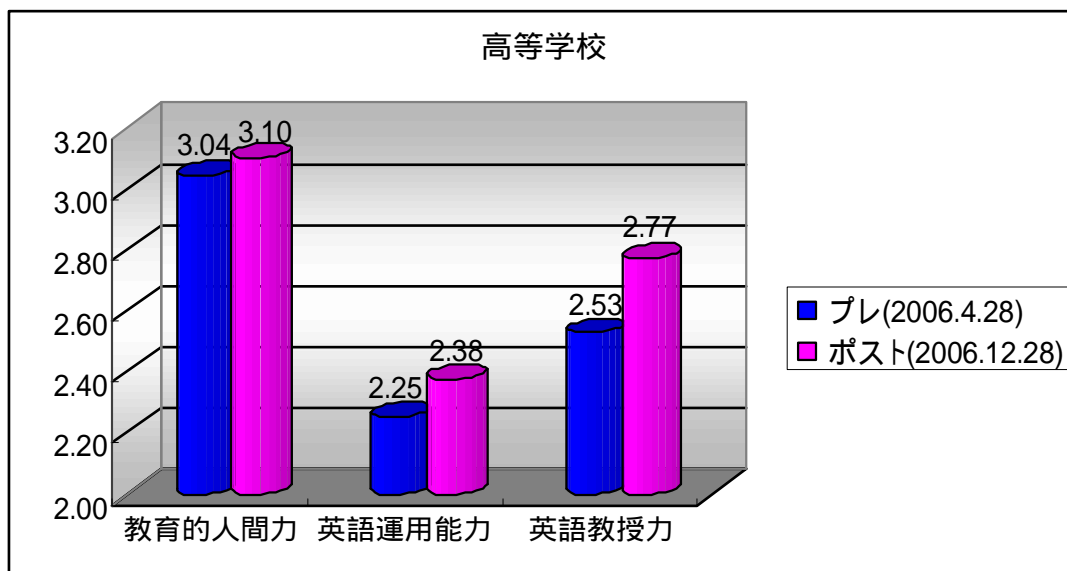
平成16年度			設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的 人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	2.95	3.12	3.04	3.04
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.14	3.20	3.17	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.00	3.12	3.07	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	3.00	2.96	2.98	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.86	3.04	2.96	
2 英語 運用 能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.43	2.24	<u>2.33</u>	2.70
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.62	2.64	2.63	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.57	2.80	2.70	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.67	2.92	2.80	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.10	3.00	3.04	
3 英語 教授 力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	3.05	3.16	3.11	2.84
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。	2.71	2.92	2.83	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。	2.76	3.12	2.96	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.48	2.43	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.81	2.96	2.89	
平均			2.80	2.91	2.86	

平成17年度			設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的 人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	3.32	3.14	3.22	3.07
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.05	3.07	3.06	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.27	2.96	3.10	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	3.23	2.71	2.94	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	3.05	3.00	3.02	
2 英語 運用 能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.59	2.32	<u>2.44</u>	2.85
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.82	2.68	2.74	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	3.05	2.86	2.94	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.91	2.82	2.86	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.41	3.14	3.26	
3 英語 教授 力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	3.32	3.21	3.26	2.97
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。	3.00	2.86	2.92	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。	3.00	2.86	2.92	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.86	2.68	2.76	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	3.18	2.86	3.00	
平均			3.07	2.88	2.96	

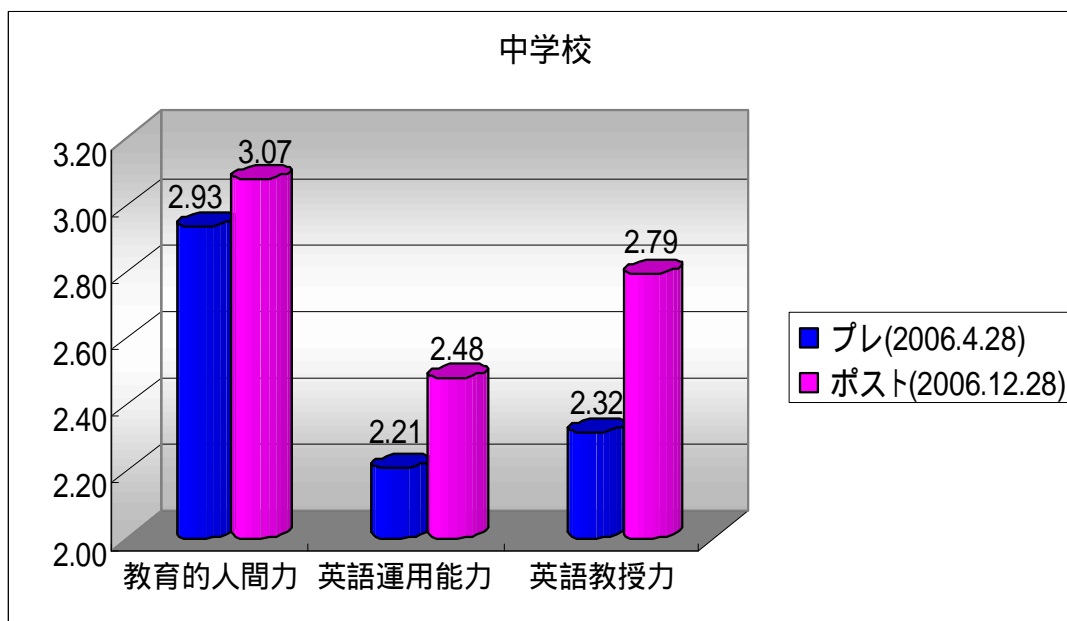
18年度全体の傾向

18年度の受講者数は過去最多の98名となった。受講者の環境も県内全域の中学校、高等学校、定時制、通信制、養護学校と幅広く、学校規模も様々であった。18年度も同じ形式の自己評価を実施した。以下のグラフは、研修前と研修後の自己評価を比較したものである。

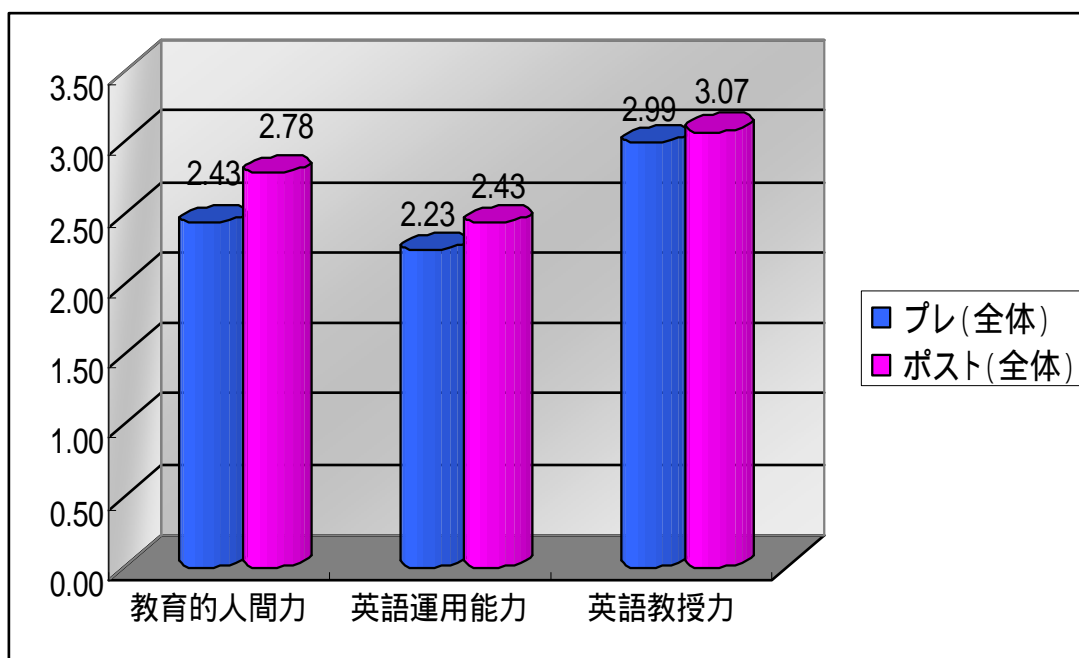
〔高等学校〕



〔中学校〕



〔全体〕



成果

- ・ 「英語教授力」の小項目「現在授業を通じて、生徒の英語力が高まっていると思う。」については、授業改善についての実感があるととらえている受講者が多い。「教材研究にあてる時間も増え、充実した授業をしたいと感じている。」という受講者の声もあり、アクション・リサーチを通して授業改善を行った結果、生徒の学習結果にもよい傾向が表れていると思われる。
- ・ 「英語授業力」の小項目「英語教育に関する専門的な知識をもっている。」については、毎年自己評価が低い項目であるが、1を選択した者が大幅に減少しており、本研修により、教科教育に対する専門的な知識が身に付いたという実感を得ていることがわかる。これはアクション・リサーチのプロセスや、夏期集中研修でのCASEC受験、テスト作成の観点など、新学期からすぐに使える教授法などを学んだ結果、教えることに自信を持てたことを表している。「この研修がなかったら、自分の授業は昨年と変化のないものではなかったかと思う。」「自分の欠点や課題が明確になり、今後の方向性が見えてきた。」という受講者の声からも、授業改善の視点が育ってきたと思われる。

課題

- ・ 「教育的人間力」の小項目「授業をすることが楽しい」について大きな変化はない。これは授業にやりがいを感じている一方で、課題を抱え、悩んでいる教員が増えたからではないか。
- ・ 「英語運用能力」の小項目「授業で可能な限り英語を使おうとしている。」については、中学校で大きく改善しているが、高等学校では後退している。
- ・ 「英語授業力」の小項目「授業終了後、ほぼ毎日、授業について振り返りをしている。」については、高等学校ではあまり変化がないが、中学校でやや減少している。学校の多

忙化の影響が懸念される。

総合所見

授業中教師が使用する英語の量を増やすことなど、改善点が多いが、「英語を教えるプロ」としての自覚をし、自分の授業を正面から受け止めることによって、内省する部分が多くなったのではないと思われる。報告会終了後のアンケートでは、「アクション・リサーチをする中で、生徒の向上というより、自分自身の向上の方に実感があった。」「自分自身の授業について深く見つめ、改善していく機会となった。これからもアクション・リサーチを続けていきたい。」「自分が日々悩んでいることに、一つの筋道をつけてもらったと思い、感謝している。」「データ化することは自分にとって弱い点だったので、改めて成果がわかり、課題も見えてきた。」というような声が聞かれた。また、アクション・リサーチに取り組むことを生徒に宣言し、「先生、授業が変わったね。」など、生徒が好意的に受け止めてくれていることも報告されている。

12 最終年度に向けて

メーリングリストを活用したサポート体制の充実

学校現場ではメールを毎日チェックする環境が整えられておらず、こちらからの一方通行的な情報発信になりがちだが、英語担当指導主事が細かなサポートを行い、受講者からも発信してもらえるようにしていきたい。

研修運営そのものがアクション・リサーチ

受講者のニーズに合わせて内容を見直し、精選している。「進化する研修」をキーワードに、改善を続けていく。

13 5年間の成果として

「種まき」完了

5年間でほぼ全英語教員が受講し、「種まき」ができたことになる。英語教師としての意識改革は確実に始まっている。全ての受講者のメーリングリストを完成し、高知県内の英語教員の情報共有の場にしたい。

「終わり」がスタート

新里(2000)「教師は、この省察的アプローチを少しずつ内在化させていき、自立した英語教師(self-directed teacher)に成長していくのである」と述べている。アクション・リサーチの手法を身に付けた英語教員が、今後学校でどのように授業改善を進めて行くかが大切である。教師が自己改革することで、授業が改善され、生徒にとって「わかる楽しい授業」が構築される。この研修の波及効果はこれから期待されるところである。

教師である限り、アクション・リサーチは続く

英語教員指導力向上研修
「授業改善プロジェクト」

Action Research Navigator



高知県教育センター

リサーチ・グループ	所属	氏 名
J H S H		

INDEX

1	英語教師の自己実現のために	1
2	「授業改善プロジェクト」の達成目標	2
3	「授業改善プロジェクト」の概要	3
4	「授業改善プロジェクト」で用いる研究手法	4
5	「授業改善プロジェクト」の1年間の流れ	6
6	サポート体制	7
Action Research Navigator 1 - 10		8
様式集		31
参考文献		38

リサーチ・グループ JH・SH ()

所属	氏 名	メールアドレス	電話番号

メンター

所属	氏 名	メールアドレス	電話番号

【協働及びメンタリングスタッフ】

高知県教育委員会事務局（高知県教育センター 小中学校課 高等学校課 東部・中部・西部教育事務所）
 高知市教育委員会事務局（学校教育課 高知市教育研究所）

1 英語教師の自己実現のために

今、学校教育は様々な困難に直面しています。

生徒が変わりました。

社会生活、家庭生活の変化などから、生徒が大きく変わっています。一人一人の子どもを理解し、それを授業や学級運営に生かしていくような姿勢が求められています。

学ぶ意欲が低下しています。

各種の調査結果からも、生徒の学ぶ意欲が急速に低下していることが分かっています。生徒の学びを再生できるような、授業改革を実行できなければ、学びの崩壊は止まりません。

変化の激しい時代になりました。

社会の動き、価値観の変化が、あまりに急速すぎて、過去の経験や古い指導理論では対処できなくなっています。このような変化に柔軟に対応できる能力を身につける必要があります。

教室に根ざした実践研究が求められています。

これまでは、理論的な研究に基づく教授法を、学校現場に「下ろして」検証をするという研究が中心でした。これからは、教室に居る教師が、一人の自律した Researcher として、主体的に実践研究を進めることが求められます。

説明責任が強く求められる。

英語を教えるだけでなく、何を、なぜ、どのような方法で教え、その結果、どのような力が身に付いたか、身に付かなかったかを、明確に説明することが求められるようになっていきます。

社会が変わり、生徒が変わり、教室が変わり、教育の目標が変化した中で、生徒のニーズを直視した授業研究が求められており、しかも、「その研究には、複雑な要因をまるごととらえ、かつ長期的な新しい研究方法」(佐野,2000)が必要になっています。

しかし、授業というのは様々な要素の絡みあった非常に複雑なものであり、自分自身の行動や実践を、自分自身で振り返って、効果的に改善していくことは、容易なことではありません。

これらのことを解決する方法として、アクション・リサーチが注目されています。

アクション・リサーチは、教師が自分自身の授業を省察する過程を通して、指導についての知識や理論を発展させることができる実践研究の方法です。新里(2000)は、「教師は、この省察的アプローチを少しずつ内在化させていき、自立した英語教師(self-directed teacher)に成長していくのである。」と述べています。

本県の英語教員指導力向上研修では、年間を通して行う授業改善プロジェクトの中で、全員の受講者にアクション・リサーチの手法を身に付けていただきます。

アクション・リサーチに取り組むということは、英語教師としての自分の魅力に磨きをかけるということです。自己成長、自己実現を楽しむことのできる人間でありたい。そのような情熱に満ちあふれた人間が、真にプロの教師と言えたいと思います。

高知の子どもたちの夢の実現のために、新しいチャレンジの1年にしていきたいと思います。

2 「授業改善プロジェクト」の達成目標

[目指す英語教師像]

良質の英語を使った授業を展開することができ (REAL English Teacher)、省察によって授業を改善する方法を身に付け (reflective practitioner)、新しい英語教育の創造に自ら積極的にコミットする英語教員 (self-directed teacher)

[授業改善プロジェクトの達成目標と評価の観点]

1 教育的人間力

(教職に対する情熱、使命感、生徒に対する教育愛)

- 1) 授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
- 2) 生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
- 3) 授業の目標や手段や評価について、深く考察する姿勢ができ始めている。
- 4) 職場の同僚と、英語教育の問題点について気軽に話をするができる。
- 5) 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。

2 英語運用能力

(英語運用能力の向上とそれを生かした授業の実施)

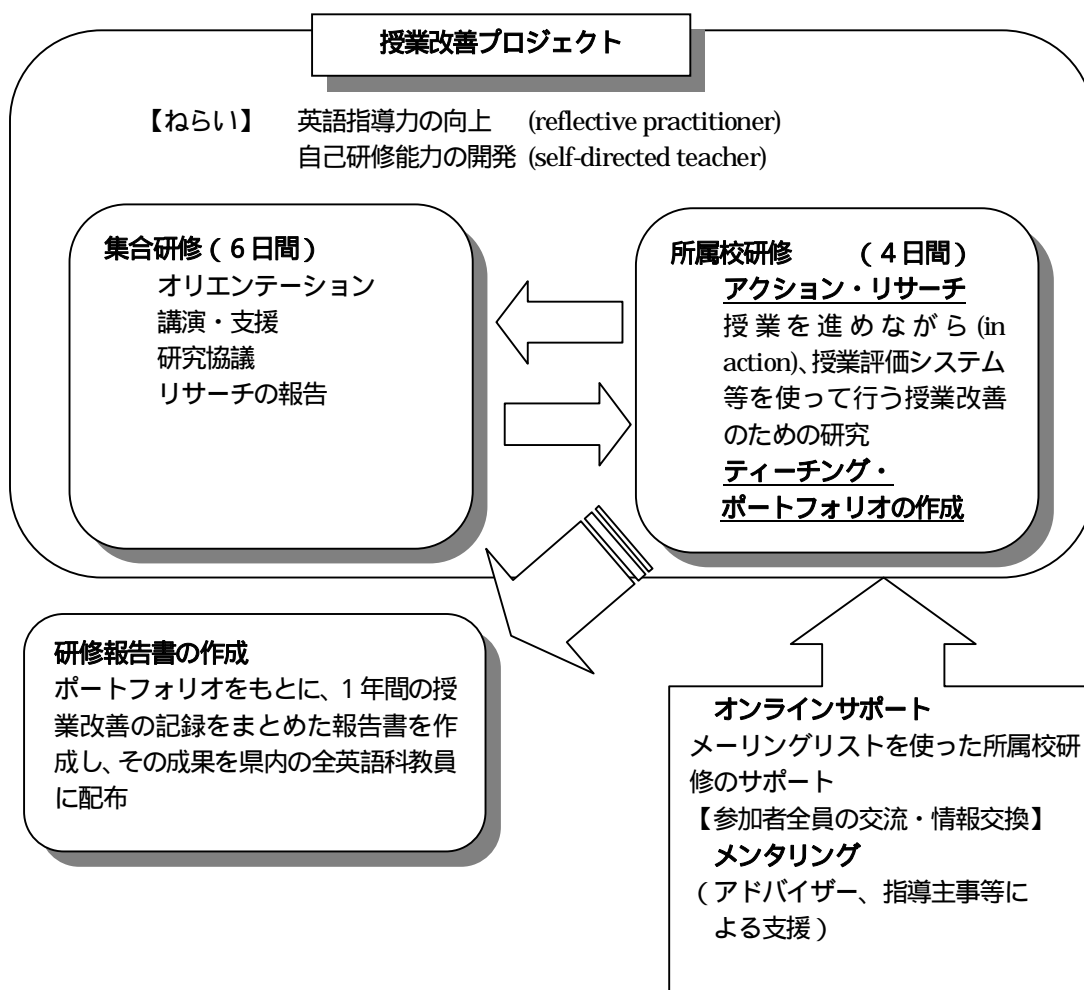
- 1) 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
- 2) 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
- 3) 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
- 4) 可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
- 5) 生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。

3 英語教授力

(教科指導に関する専門的知識と技能の向上)

- 1) アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
- 2) 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。
- 3) 課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。
- 4) リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
- 5) 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。

3 「授業改善プロジェクト」の概要



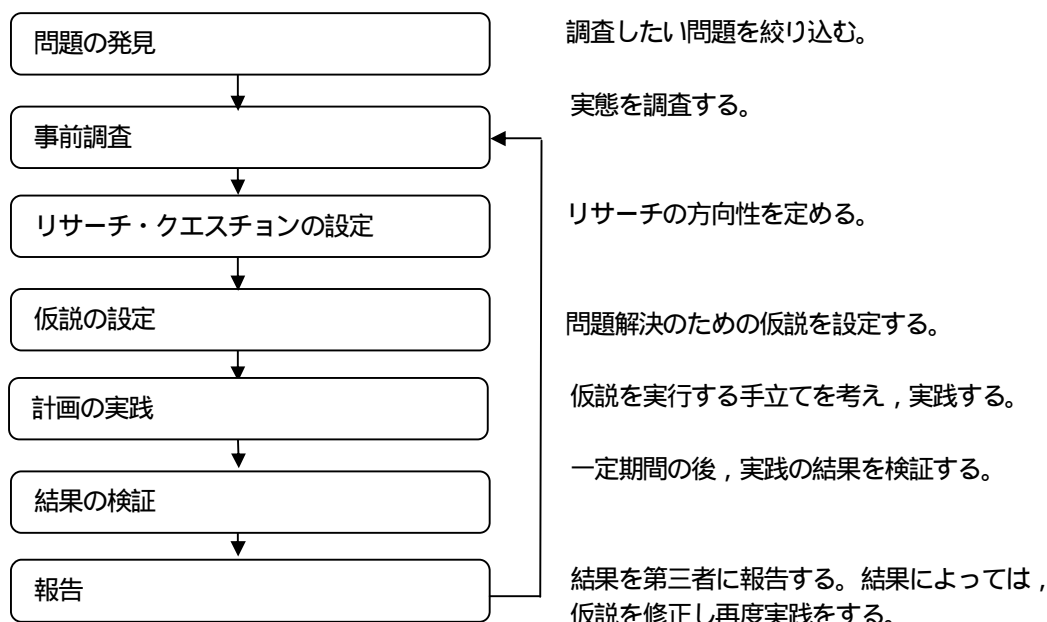
- ✓ 所属校研修でのアクション・リサーチと集合研修での研究協議を組み合わせで実施します。
- ✓ 所属校研修でのアクション・リサーチを効果的にかつ簡単に進めることができるように、アクション・リサーチ・アドバイザーから課題を4回分出します。
- ✓ 4回分の課題に取り組むことで、アクション・リサーチの基本的な流れが身につくようになっていきます。
- ✓ 4回分の課題の終了をもって、4日分の研修終了とみなします。
- ✓ 所属校研修をサポートするために、メーリングリストを設置します。
- ✓ 1年間のリサーチの取組は、その経過と結果をティーチング・ポートフォリオに蓄積していきます。
- ✓ 1年間の研修の成果を報告書にまとめ、県内の全ての英語科教員で共有します。

4 「授業改善プロジェクト」で用いる研究手法

(1) アクション・リサーチ

教師が授業を進めながら、生徒や同僚の力も借りて、自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことによって、次第に授業を改善していく小規模でシステマティックな実践研究の方法

アクション・リサーチの手順



アクション・リサーチを行うに当たっての心構え

授業にプラスして調査を行うのではなく、授業の中で授業をよりよくする調査
教師の思い込みから脱却し、生徒の実態や願いにもとづく調査
まず、生徒をよく見ること、可能性を信じること。
途中の結果に一喜一憂せず、長期的な視点で、リサーチを持続すること。
問題の解決だけでなく、教師の意識改革も必要。

アクション・リサーチを行うことのメリット

教師の自己成長が促される。	教え方の情報発信者となることができる。
教師同士のネットワークが広がる。	報告により教師という職業の理解が深まる。
教授・学習環境が改善される。	教師と学習者の信頼感・親密感が増す。

(2) ティーチング・ポートフォリオ

ある一定期間行った教授活動に関するあらゆるものを、参加する教師自らが積極的に保管・整理することによって、教師としての自己成長の過程と結果を記録するシステム

ティーチング・ポートフォリオのコンテンツ

[自分自身のもの]

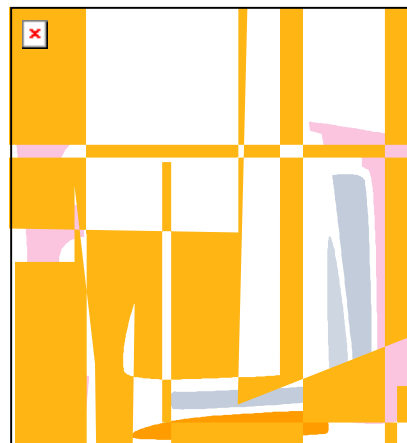
自分自身の教育哲学（教育に関する考え方）をまとめたもの
担当する授業・講座の詳しい説明（授業・講座の内容、教科書、補助教材、授業形態など）
年間指導計画やシラバス
学習指導案（公開授業等で配付したものなど）
授業を録画したもの
授業に関する観察や反省の記録やメモ
使用した教材

[他の人からのもの]

授業観察者の評価、コメント
生徒による授業評価、授業評価システムの結果
生徒の作品

ティーチング・ポートフォリオ作成の意義

より深く、継続的な内省が可能になる。
自己成長の喜びを実感できる。
説明責任の証拠となる。



Portfolios

5 「授業改善プロジェクト」の1年間の流れ

時期		ねらい	アクション・リサーチ	ポートフォリオ	課題
4月	事前研修課題	授業実践の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 研究の背景 現状の振り返り 問題点の洗い出し 	1 研究の背景 <ul style="list-style-type: none"> 学校案内 教科経営計画 シラバス、年間指導計画 授業開き配布資料等 	課題1
5月11日	オリエンテーション	アクション・リサーチの理解 解決すべき課題の明確化	<ul style="list-style-type: none"> 問題の発見 	2 問題の発見 [事前研修課題] 課題1 英語運用能力 課題2 授業実践の振り返り 【課題1の要約と自己評価】	
5月ー7月	前期所属校研修	予備調査による実態把握 リサーチの方向性の決定 仮説の設定と実践の計画立案	<ul style="list-style-type: none"> 予備調査、文献研究  <ul style="list-style-type: none"> リサーチ・クエスチョンの設定  <ul style="list-style-type: none"> 仮説の設定 仮説の試行 	3 予備調査 <ul style="list-style-type: none"> A 授業観察 B 授業評価 C 学力データ 4 リサーチ・クエスチョン 5 仮説 【課題2の要約と自己評価】	課題2
8月6日ー10日	夏期集中研修	課題1・2によるリサーチの振り返り	[リサーチ中間報告] <ul style="list-style-type: none"> 中間報告 3日 研究協議 1日 		
9月ー11月	後期所属校研修	計画の実践と結果の検証	<ul style="list-style-type: none"> 計画の実践  <ul style="list-style-type: none"> 結果の検証 	6 計画の実践 <ul style="list-style-type: none"> 仮説ごとの実践の資料 指導案、授業WSなど 7 結果の検証 <ul style="list-style-type: none"> 検証データなど 【課題3の要約と自己評価】	課題3
12月		リサーチのまとめ	・1年間の振り返り	成果と課題 【課題4】報告書用原稿作成	課題4
12月26日	研修報告会	研究成果の共有	[ポスターセッションによる最終報告]	【報告書、電子ファイル提出】	

6 サポート体制

(1) リサーチ・グループ (RG) の編成

- ・ 3名を基本単位として、研究協議班を編成します。(4名の班となることもあります。)
- ・ グループ別研究協議などでは、この班で活動します。

(2) メーリング・リスト

- ・ 1年間の所属校研修を支援するためにメーリング・リストを開設します。このアドレスにメールを送ると、登録メンバー全員にメールが届く仕組みになっています。また、佐野先生からアドバイスをいただいたり、お互いのリサーチについて意見交換をしたり、教材やコミュニケーション活動の紹介をすることができます。

e_project@kochieigo.jpn.org

- ・ メーリング・リストには、受講者とメンター(担当指導主事)が登録されています。

(3) メンターによるサポート

年間を通じて、下記所属の英語担当指導主事がアクション・リサーチについての相談を受けています。気軽に御連絡ください。

高知県教育委員会事務局

(高知県教育センター、小中学校課 高等学校課 東部・中部・西部教育事務所)

高知市教育委員会事務局

(学校教育課、高知市教育研究所)

オリエンテーションの時に、担当のメンターをお知らせします。表紙裏のメンター欄に必ず名前や連絡先を書いておきましょう。

メンターとは？

皆さんが抱えた問題や課題を見出し、それを解決するために、ともに学び、ともに探求するものとして関わっていく者のことです。皆さんの課題解決の支援者、伴走者となります。

メンターという名称は、ギリシャ神話で、トロイ戦争に出陣するオデッセウスが我が子の教育を託した名教師の名に由来します。アメリカでは、1980年代から人事制度として取り入れられており、そのメンターによるアドバイスを「メンタリング」と言います。近年、企業などで活用されている「コーチング」とほぼ同じものと考えて良いでしょう。

Action Research Navigator 1

問題の発見

STEP 1 問題の発見とは？

自分自身の授業についての考え方、これまでの実践の反省、自分自身のもっている望み、授業で取り組んでみたいことなど、授業についてもっている漠然とした問題意識のことです。

(問題の例)

- ・既習の文法事項を使って、まとまった英文を書けるようにさせたい。
- ・論説文を、正確に読み取る力が身に付いていない。
- ・中学校の週1回の選択授業でスピーキング力を身に付けさせるにはどのようにすればよいか。

予備調査を経て、リサーチの具体的な道筋を「疑問文」の形で表したものが、リサーチ・クエスチョンになります。(p.13 参照)

STEP 2 授業実践の振り返り(事前研修課題1～3) 【オリエンテーションまでに実施】

アクション・リサーチ(以下、AR)を始めるには、まず、何をテーマとしてとりあげるかリサーチのスタート地点を見つけなければなりません。今、あなたの英語教室の課題は何でしょうか。それを発見するために、これまでの授業実践を少し振り返ってみましょう。

STEP 3 オリエンテーション 5月11日(金)

STEP 4 問題の絞り込み

- ・ここで、いよいよ、1年間ARで取り上げる問題を決定します。
- ・この時点では、ある程度漠然としたものでかまいません。
- ・はじめてのARを成功させる秘訣は次の3つです。

- その1 多くの生徒の願いにかなったもの。
- その2 自分自身の手におえるもの。
- その3 一番関心のあること。

これらを考え合わせて、決めてください。

STEP 5 アクション・リサーチ宣言！

「より良い授業をつくって、みんなの力をつけたい！協力をよろしく！」

- ・1年間ARに取り組むようになったことを生徒の皆さんにも伝えてください。
- ・授業改善には、生徒や同僚の力を借りることが大切です。
- ・研究の報告では、クラスの様子や学習の進み具合を、他の先生方と共有することを伝えておいてください。

事前研修課題（オリエンテーションまでに取り組む課題）

STEP 1 事前研修課題とは？

この研修では、研修をより効果的に進めるために、事前研修課題(p.10～15)に取り組んでいただきます。事前研修課題は、参加者の皆さんの自己分析や現状把握を中心としたもので、次の3つがあります。

- | | |
|----------|---|
| 事前研修課題 1 | English Proficiency (英語運用能力) |
| 事前研修課題 2 | Getting Ready for Action Research (授業実践の振り返り) |
| 事前研修課題 3 | 授業改善プロジェクト英語授業力自己評価票 |

それぞれに課題に取り組み、これまでの自分自身の授業実践を、振り返ってください。

事前研修課題 1、2 は、オリエンテーションの中で使用します。

事前研修課題 3 は研修終了後回収します。

STEP2 課題の実施に当たって

事前研修課題 1、2 は直接記入してください。事前研修課題 3 は、コピーして記入するか、高知県教育センターの Web サイト（下記）からダウンロードして作成してください。

<http://www.kochinet.ed.jp/center/kyouka/kochieigo/index.htm>

事前研修課題 3 には、電子メールアドレスの記入欄があります。1 年間の研修期間中、情報交換や意見交換に使用しますので、必ず記入してください。

使用するメールアドレスについては、原則として仕事用（教育ネット）のものにしてください。仕事用アドレスが使えない場合は、下記の優先順位で、希望するものを選んでください。

個人用アドレス（自宅等で使用している個人のアドレス。長いメールや添付ファイル付きの場合もあるので注意してください。）

学校用メールアドレス（学校の代表メールアドレス）

<参考資料>

- 過去のアクション・リサーチを参考にしたい場合は、高知県教育センターの Web サイトを見てください。
- 参考文献（研修参加までに目を通しておくの良い資料です）
 - 佐野正之(2000)『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店
 - 佐野正之(2005)『はじめてのアクション・リサーチ』大修館書店
 - J.C. Richard 他著、新里眞男訳(2000)『英語教育のアクション・リサーチ』研究社
 - 横溝紳一郎(2000)『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社

事前研修課題1 English Proficiency (英語運用能力)

(1) Self-Diagnosis (自己分析)

次ページの「Self-Assessment Grid」を参照のうえ、該当すると思うレベルを で囲んでください。また、それぞれの領域について、自信のあるスキルや高めたいと思うスキルについて簡単にコメントを記入してください。

		Self-Assessment	Comment
Understanding	Listening	A1 A2 B1 B2 C1 C2	
	Reading	A1 A2 B1 B2 C1 C2	
Speaking	Spoken Interaction	A1 A2 B1 B2 C1 C2	
	Spoken Production	A1 A2 B1 B2 C1 C2	
Writing	Writing	A1 A2 B1 B2 C1 C2	

授業での英語の使用状況は平均すると授業時間の何%くらいか書いてください。

(%)

(2) English for EFL Teachers (英語教員の英語力)

英語教員に必要な英語力とはどのようなものだと思いますか。あなたの意見を書いてください。

『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』には、英語授業改善の目標の一つとして、「英語の授業の大半は英語を用いて行い、生徒や学生が英語でコミュニケーションを行う活動を多く取り入れる。」とあります。このことについて、あなたの意見を書いてください。

Self-Assessment Grid

		A1	A2	B1	B2	C1	C2
U N D E R S T A N D I N G	Listening	I can understand familiar words and very basic phrases concerning myself, my family and immediate concrete surroundings when people speak slowly and clearly.	I can understand phrases and the highest frequency vocabulary related to areas of most immediate personal relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local area, employment). I can catch the main point in short, clear, simple messages and announcements.	I can understand the main points of clear standard speech on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. I can understand the main point of many radio or TV programmes on current affairs or topics of personal or professional interest when the delivery is relatively slow and clear.	I can understand extended speech and lectures and follow even complex lines of argument provided the topic is reasonably familiar. I can understand most TV news and current affairs programmes. I can understand the majority of films in standard dialect.	I can understand extended speech even when it is not clearly structured and when relationships are only implied and not signalled explicitly. I can understand television programmes and films without too much effort.	I have no difficulty in understanding any kind of spoken language, whether live or broadcast, even when delivered at fast native speed, provided. I have some time to get familiar with the accent.
	Reading	I can understand familiar names, words and very simple sentences, for example on notices and posters or in catalogues.	I can read very short, simple texts. I can find specific, predictable information in simple everyday material such as advertisements, prospectuses, menus and timetables and I can understand short simple personal letters.	I can understand texts that consist mainly of high frequency everyday or job-related language. I can understand the description of events, feelings and wishes in personal letters.	I can read articles and reports concerned with contemporary problems in which the writers adopt particular attitudes or viewpoints. I can understand contemporary literary prose.	I can understand long and complex factual and literary texts, appreciating distinctions of style. I can understand specialised articles and longer technical instructions, even when they do not relate to my field.	I can read with ease virtually all forms of the written language, including abstract, structurally or linguistically complex texts such as manuals, specialised articles and literary works.
S P E A K I N G	Spoken Interaction	I can interact in a simple way provided the other person is prepared to repeat or rephrase things at a slower rate of speech and help me formulate what I'm trying to say. I can ask and answer simple questions in areas of immediate need or on very familiar topics.	I can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar topics and activities. I can handle very short social exchanges, even though I can't usually understand enough to keep the conversation going myself.	I can deal with most situations likely to arise whilst traveling in an area where the language is spoken. I can enter unprepared into conversation on topics that are familiar, of personal interest or pertinent to everyday life (e.g. family, hobbies, work, travel and current events).	I can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible. I can take an active part in discussion in familiar contexts, accounting for and sustaining my views.	I can express myself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. I can use language flexibly and effectively for social and professional purposes. I can formulate ideas and opinions with precision and relate my contribution skilfully to those of other speakers.	I can take part effortlessly in any conversation or discussion and have a good familiarity with idiomatic expressions and colloquialisms. I can express myself fluently and convey finer shades of meaning precisely. If I do have a problem I can backtrack and restructure around the difficulty so smoothly that other people are hardly aware of it.
	Spoken Production	I can use simple phrases and sentences to describe where I live and people I know.	I can use a series of phrases and sentences to describe in simple terms my family and other people, living conditions, my educational background and my present or most recent job.	I can connect phrases in a simple way in order to describe experiences and events, my dreams, hopes and ambitions. I can briefly give reasons and explanations for opinions and plans. I can narrate a story or relate the plot of a book or film and describe my reactions.	I can present clear, detailed descriptions on a wide range of subjects related to my field of interest. I can explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.	I can present clear, detailed descriptions of complex subjects integrating sub-themes, developing particular points and rounding off with an appropriate conclusion.	I can present a clear, smoothly-flowing description or argument in a style appropriate to the context and with an effective logical structure which helps the recipient to notice and remember significant points.
W R I T I N G	Writing	I can write a short, simple postcard, for example sending holiday greetings. I can fill in forms with personal details, for example entering my name, nationality and address on a hotel registration form.	I can write short, simple notes and messages. I can write a very simple personal letter, for example thanking someone for something.	I can write simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. I can write personal letters describing experiences and impressions.	I can write clear, detailed text on a wide range of subjects related to my interests. I can write an essay or report, passing on information or giving reasons in support of or against a particular point of view. I can write letters highlighting the personal significance of events and experiences.	I can express myself in clear, well-structured text, expressing points of view at some length. I can write about complex subjects in a letter, an essay or a report, underlining what I consider to be the salient issues. I can select a style appropriate to the reader in mind.	I can write clear, smoothly-flowing text in an appropriate style. I can write complex letters, reports or articles which present a case with an effective logical structure which helps the recipient to notice and remember significant points. I can write summaries and reviews of professional or literary works.

事前研修課題2 Getting Ready for Action Research (授業実践の振り返り)

アクション・リサーチ（以下、AR）を始めるには、まず、何をテーマとしてとりあげるかリサーチのスタート地点を見つけないければなりません。今、あなたの英語教室で解決すべき問題は何でしょうか。それを発見するために、これまでの授業実践を少し振り返ってみましょう。

（１）研究の背景

あなたの勤務校の状況が分かる下記 ～ の資料を準備し、添付してください。

学校案内など（学校の概要の分かる資料）

教科経営計画（教科会で設定している到達目標や指導方針などを記述したもの）

年間指導計画またはシラバス（研修でとりあげたいと考えている学年のもの）

授業開きの日に配布したプリントや資料など

上記資料をもとに、あなたの生徒の現状や学校が設定している英語力の目標を書いてください。

（２）生徒のニーズ

あなたの受け持っているクラスの生徒（ARで対象とする生徒）が英語学習に対してどのような期待や願いをもっているか、簡単なアンケートを実施して、その結果を添付し、下にその結果を簡単にまとめてください。

（質問項目の例）

- ・英語の授業で、どのような力を身に付けたいですか？
- ・英語の授業で、難しいと思うところはどのようなところですか？
- ・どのような英語の授業を受けたいですか？

（３）英語授業観

授業をするうえであなたが大切にしていること、こだわっていることは、何ですか。

あなたが目指したいと思っている授業はどのようなものですか、説明してください。

これまでに授業の中で試してみたいと思ってきたことがありますか。それは何ですか。

(4) 授業の課題

あなたが、授業の中で自信をもっていることは何ですか。

あなたが、授業の中で自信がないことは何ですか。

あなたが授業の中で、特に伸ばしたいと思っている技能(4技能)や領域(文法、語彙など)は何ですか。

あなたが今受け持っているクラスの生徒の課題はどのような点ですか。

今、授業の中で困っていることや、困難を抱えていることがありますか。それは何ですか。

事前研修課題 3

(コピーして記入または、Web サイトからダウンロードして作成)

授業改善プロジェクト 英語授業力自己評価票

受講 番号		学校名		氏名	
----------	--	-----	--	----	--

評価 (A-Excellent B-Good C-Fair D-Poor)

1 教育的人間力 (教職に対する情熱、使命感、生徒に対する教育愛)

	達 成 目 標	評価
1	授業をすることが楽しい。	
2	授業の目標や授業の進め方について深く考察している。	
3	職場の同僚と授業について気軽に話をしている。	
4	生徒との間に望ましい人間関係を築けている。	
5	生徒の願いやニーズを踏まえて、授業を改善している。	

2 英語運用能力 (英語運用能力の向上とそれを生かした授業の実施)

	達 成 目 標	評価
1	授業で可能な限り英語を使おうとしている。	
2	英語で授業をすることは、負担ではない。	
3	授業中、生徒が英語を使う機会は多い方である。	
4	英語力を高めるための自己研修を日常的に行っている。	

3 英語教授力 (教科指導に関する専門的知識と技能の向上)

	達 成 目 標	評価
1	現在、授業を通じて、生徒の英語力が高まっていると思う。	
2	現在、授業運営はうまくいっており、生徒の授業態度は良好である。	
3	授業終了後、ほぼ毎日、授業についての振り返りをしている。	
4	アクション・リサーチの進め方を理解している。	
5	英語教育に関する専門的な知識をもっている。	

4 研修用電子メールアドレス

@kt .kochinet.ed.jp

教育ネット以外のアドレスの場合は下記に記入してください。

--

5 アクション・リサーチを実施するに当たって、疑問や不安に感じるものがあれば、書いてください。

オリエンテーション

目 的

- (1) 授業実践の振り返りの活動を通して、各自が抱える課題や問題についての理解を深める。
- (2) A Rの進め方についてについて理解する。

日 程

- 12:50～13:20 受 付
- 13:20～13:50 開講式
- 13:50～14:50 授業改善プロジェクトオリエンテーション
- 15:00～16:45 講 演 佐野 正之 先生

内 容

TASK 1 「課題1 English Proficiency (英語運用能力)」

“Action Plan to Cultivate “Japanese with English Abilities”” says “The majority of an English class will be conducted in English and many activities where students can communicate in English will be introduced.” What do you think about it? In pairs, discuss with your partner in English.

TASK 2 「課題2 Getting Ready for Action Research (授業実践の振り返り)」

事前研修課題では、次の4点について、振り返ってもらいました。

- (1) 研究の背景 (2) 生徒のニーズ (3) 英語授業観 (4) 授業の課題

これをもとに、ペアで活動します。

[進め方]

ペアで、クライアントとコーチに分かれます。

クライアントになった人は、振り返った内容をコーチに報告してください。

コーチは、クライアントの話に対して、良し悪しの判断をせず、そのまま受け入れる姿勢で聞いてあげてください。(「傾聴」と言います。)

話の中で、よく分からないこと、確信がなさそうなことについて、質問をしてあげてください。

(クライアント自身の振り返りが、より深まるよう援助してあげることが目的です。)

一通り終わったら、一言コメントを言って、役割を交代してください。

TASK 3 アクション・リサーチ・アドバイザー(佐野正之先生)の講演を聞いて、A Rで取り上げたい問題を絞り込みましょう。

ポートフォリオ CHECK

課題1「事前研修課題」で行った活動の結果

課題1の要約と自己評価(様式1)

Action Research Navigator 2

事前調査

STEP 1 事前調査とは？

選んだ問題について、どのような状態なのか、実際に何が起きているかを調べ、リサーチのより具体的な方向性を定めます。

STEP 2 事前調査を実施します。

調査には質的調査（観察やアンケート）と量的調査（テストなど）があります。
今回のARでは、共通の課題として、全員が次の3つの調査に取り組みます。

授業観察	授業の様子を観察して、そのうち数回分を【様式2】に記録してください。
生徒による授業評価 （診断的）	とりあげる問題についての生徒の意識や希望を調べてみます。
学力データ	英語力についての具体的な数値データを調べます。 （例）定期テスト 外部の標準的なテストの問題の一部、 語彙サイズテスト、 CRT、模擬テスト

STEP 3 仮説設定に向けて

文献研究は大切です。

事前調査で実態をつかむことができれば、ぜひ文献を調べてみてください。分厚い学术论文を読む必要はありません。これまでの、その分野でどのようなことが分かっているか、どのような実践がなされてきたかなど、調べておくと、仮説を設定する時に役に立ちます。

ARの事例も見てください。

同じテーマで実施されたAR（過年度の研修報告書や『はじめてのアクション・リサーチ』）に目を通すだけでも、得られるものは多いはずです。

同僚や仲間に意見をきいてみましょう。

同じような悩みをもった人やその分野に詳しい人がいるはずです。ぜひ、意見を聞いてみてください。思い込みから解放してくれるきっかけになりますし、ヒントも得られるはずです。



ポートフォリオ CHECK

課題2のうち、予備調査の結果

Action Research Navigator 3 リサーチ・クエスチョンの設定

STEP 1 リサーチ・クエスチョンとは？

発見した問題を解決するための方向性を、分かりやすく表明したものがリサーチ・クエスチョンです。後に続く実践や検証は、このリサーチ・クエスチョンに対する自分なりの「答え」を出すこととなります。

(リサーチ・クエスチョンの例)

- ・教師や辞書の助けを借りながらも、内容が豊かで、コミュニケーションに必要な正確さをもった英文を書ける力を身に付けさせ、7割の生徒が1ランクうえのレベルに達するにはどのような指導をすればよいか。
- ・英語に対する苦手意識が強いクラスで、生徒が自信をもって授業中の活動に参加し、英語がわかる・できるという実感をもてるように、基礎的な英語力を付けるには、どのような指導が効果的か。

STEP 2 リサーチ・クエスチョンを書く。

次のような点を考え合わせて、【様式3】にリサーチ・クエスチョンを完成させましょう。

教室の現状を踏まえているか。
 生徒に達成してほしいことが表れているか。
 クラスの大部分の生徒が達成できるレベルになっているか。
 さしあたりの対策がすぐに思いつくか。
 授業で実施が可能なことか。
 目標が達成されたかどうかを評価することが可能か。
 生徒にとって有益で、説明すれば協力が得られることか。

「問題の発見」と「リサーチ・クエスチョン」の違いがやや分かりにくいかもしれませんが、説明を加えておきます。

- 問題の発見・・・漠然とした問題意識のことです。複数の問題が意識され、混在しています。
 「長文を読めない。」「読む速度が遅い。」など
- リサーチ・クエスチョン・・・事前調査の結果を踏まえて、改善後の姿を描き、そこに到達するまでの道筋を大まかに疑問文の形で示したものです。
 「高1程度の基礎学力が身についたクラスで、どのようにすれば、長文をある程度のスピードで読めるようになるか。」

ポートフォリオ CHECK

課題2のうち、リサーチ・クエスチョン(様式3)

Action Research Navigator 4

仮説の設定

STEP 1 仮説とは？

事前調査の結果にもとづいて、問題の原因を考察し、その改善策と行動(action)の方略を記述したものが仮説です。

A Rの前半の最大の難関にさしかかりました。

これまでの研修参加者でも仮説の設定が難しかったという声が多くありました。まずは、現状を見て、達成可能と思える比較的容易なものを採り上げることが大切です。進み具合に応じて、途中で修正しても良いわけです。

今回の研修では、基本的に3つの仮説を設定することにします。具体的には【様式3】に以下の2つを記入してください。

仮説

実践の計画（行動の方略）

STEP 2 仮説設定のヒント

事前調査やリサーチ・クエスチョンを何度も読み返して、今、ほんとうに必要な取組なのかどうか問い直してみましょう。

クラスの現状から考えて、実施できることなのかどうか、考えましょう。

まずは、クラスの雰囲気づくり、意欲づくりを優先し、実施が容易な仮説を優先的に考えましょう。

仮説に盛り込む指導のテクニックやアイデアを、広く収集するために、実践事例などに目を通してみましょう。

STEP 3 仮説の例

<仮説1> 英文の和訳を先に渡すことで、訳読に頼らず英文を読む習慣が身に付くであろう。

<仮説2> 英文を読むときに、フレーズに区切り、その英文でRead & Lookupを重ねていけば、英文を文頭から読み進めていく習慣が身に付くであろう。

<仮説3> 内容を理解した英文を使って、フレーズ・リーディングを重ねていけば、英文を読む速度が速くなるだろう。

仮説の設定ができれば、ほぼ山は越えました。後は実践あるのみ！

ポートフォリオ CHECK

課題2のうち、仮説（様式3）

Action Research Navigator 5

仮説の試行

STEP 1 なぜ、仮説の試行をするか？

設定した仮説に基づいて、9月から本格的に実践を開始します。その前に、立てた仮説や実践の計画がどの程度有効か、少しテストしておきます。

設定した仮説の1つを取り上げ、試験的に実施してみます。

- ・生徒の反応はどうか。
- ・自分自身の感触はどうか。

などについて観察してみてください。

STEP 2 試行の結果をどうみるか？

効果が現れ始めるには、3週間程度は必要であると言われています。

生徒の反応が悪い、自分でもしっくりこない場合も、性急に仮説を捨てないことが大切です。新しいことには、常に違和感がともなうものです。

とりあえず、これまで取り組んだことを夏期集中研修で報告できるようまとめておきましょう。

STEP 3 試行結果を振り返っておく

仮説の試行の結果は、夏期集中研修での報告の重要な部分となります。問題の確定から仮説設定までの経過を今一度振り返っておきます。

<夏期集中研修への参加に当たって>

ポートフォリオの内容を確認し、チェック欄に記入しておきましょう。

自分自身で、これまでの課題、質問したいこと、疑問点などを整理しておきましょう。

ポートフォリオは忘れず持参しましょう。

ポートフォリオ CHECK

課題2の要約と自己評価(様式4)

Action Research Navigator 6

交流・共有

夏期集中研修の目的

- (1) アクション・リサーチの方法についてより確実に理解する。
- (2) 仮説の設定までが妥当であったかを検証する。
- (3) 立てた指導計画をさらに改善する。

日 程

8月6日(月)	研究協議の進め方(30分)		
	研究協議1(60分)	ポートフォリオ提出	チェック
8月7日(火)		ポートフォリオ返却	
8月8日(水)	研究協議2(60分)		
8月9日(木)	研究協議3(60分)		
8月10日(金)	事例研究(60分×2)		
	講演(75分)		

内 容

(1) プロジェクト班別研究協議1～3

仮説設定までのプロセスについて、徹底的に議論しあう。

基本的に「1日1人」のペースでアクション・リサーチの報告を行う。

(プロジェクト班が3名でない場合は時間を調整してください。)

問題の発見から、仮説の設定までのプロセスを段階的に報告してください。

ティーチング・ポートフォリオを活用して、より具体的な協議ができるように工夫してください。

班のメンバーは、できるだけ多くのコメントを出してあげましょう。

(2) 事例研究

事例研究を通して、各自の研究を改善するための方法を理解する。

(3) 講演 佐野正之 先生

仮説設定までの改善点及び計画を実践する上での留意点を理解する。

事例研究

進行説明 (13:00～13:10)

中学校、高校でそれぞれ1つの事例を選び、それぞれについて事例研究を行います。

事例発表(10分)

グループ協議(30分)

【協議のポイント】

- ・現状分析が的確か。
- ・リサーチ・クエスションは十分に絞り込まれているか。
- ・仮説の設定と実践の計画の設定が適切か。

協議内容発表(10分)

事例についての指導助言(10分)

事例研究

(1) 事例研究 1 中学校 (13:10～14:10)

(2) 事例研究 2 高校 (14:20～15:20)

(3) 講演 (15:30～16:45)

佐野正之 先生

Action Research Navigator 7

計画の実践

STEP 1 アクション・リサーチにおける授業実践

アクション・リサーチは、授業にプラスして行うものではありません。授業の中で行う、授業をよりよくするための調査です。

通常の授業の中では、仮説で設定したことだけを行っていくわけではありません。授業の Procedure の中には、様々な活動が含まれているはずです。したがって、基本的には通常の授業を進めながら、その中で、特に仮説として設定したことに、できる限りのエネルギーと時間を割いていくという姿勢が必要になります。

ただし、アクション・リサーチを実施するうえでは、生徒との人間関係づくりや望ましいコミュニケーションを維持していくなどの学習環境づくりに、常に留意しておきましょう。

STEP 2 リサーチの記録

実践の結果を検証する必要がありますので、少しずつ記録を残していきます。検証するためのデータには様々なものがありますが、以下に示すような方法を使って、無理のない程度に記録をとり、ポートフォリオに残していきましょう。

方 法	説 明
フィールドノート	医者がカルテを書くように、教師が事実を書いて記録に残す。
ティーチングログ (教授経過記録)	フィールドノートを組織的にしたもの。記入するためのフォーマットを作成し、それに従って記入する。
ダイアリー	授業で起きたことに対して、教師が考えたこと、感じたことを日記のように記録する。
学習者の内省ダイアリー	授業に対する考えや感情を学習者自身が記録する。
インタビュー	学習者に直接話をしてもらい、授業に対する考えや感情を記録する。
アンケート調査	授業評価システムなどで使用する調査用紙やアンケートを使う。
他者による授業観察	第三者による授業観察の記録
録音、ビデオ録画	実際の授業の様子を記録する。

ポートフォリオ CHECK

課題3のうち、仮説1～3の実践資料

Action Research Navigator 8

結果の検証

STEP 1 アクション・リサーチにおける結果の検証

これまで取り組んできたことの成果を見る段階にきました。できるだけ、複数の観点から実践を眺めて、総合的に検証することが大切です。

実践の結果を、様々な記録やデータをもとに検証するわけですが、自然科学の実験のように、厳密に客観性を求める必要はありません。むしろ、複数の異なる視点から結果を総合的に考察することが大切です。たとえ主観的な判断を含むデータであっても、複数の視点から繰り返し検証されることで、主観性が克服されることが考えられます。

アクション・リサーチは、調査研究が主目的ではなく、授業の中で、授業を良くすることが目的です。生徒が授業の中で、生き生きと活発に学習し、確実に目標が達成されたかどうか、つまり、授業が改善されたかどうかという点を重視するべきです。

STEP 2 検証の方法

最も一般的な方法は、事前調査と同等のものをを使って検証する方法です。

今回のアクション・リサーチは、職場での実践研究（OJT）で、授業改善のための手法を身に付けることが主目的ですから、あまり大がかりな検証は必要ないでしょう。

事前調査で行った授業評価アンケートを再度実施して変化を見る。

事前調査で行ったものと同種のテスト（WPM測定など）で変化を見る。

授業観察の記録を比較して見る。

ポートフォリオに残した記録を拾い出して、変化を読み取る。

事前に録画した授業と事後に録画した授業を比較して見る。 など

STEP 3 更新

アクション・リサーチで最も重要なのは、実はこの部分です。

初期の目的が達成されていれば

次のステップに進みます。新たな、より高い目標を設定して、これまでと同様のサイクルでリサーチを続けていきます。

× 初期の目的が達成されていなければ

これまでの記録を見直し、失敗の原因がどこにあったかを考察します。そして、それを修正した形で、もう一度同じサイクルでリサーチを継続します。

ポートフォリオ CHECK

課題3のうち、仮説1～3の検証資料

課題3の要約と自己評価（様式5）

Action Research Navigator 9

研究のまとめ

STEP 1 アクション・リサーチをまとめる

アクション・リサーチは、「プロセス」と「結果」の両方が大切です。うまくいったこと、いかなかったことなど、できるだけ分かりやすくまとめてください。

実践の結果が望ましいものであったかどうかを、検証結果をもとに、評価してください。

望ましい結果が得られなかった場合は、その原因について考察しましょう。

STEP 2 報告書原稿の執筆【様式7】

様式7のファイル（エクセル）を開くと、次のような画面ができます。この画面の入力欄に必要な事項を書き込めば、自動的に様式に基づいた報告書が完成します。詳しくは、入力要領（ファイルにあり）を良くよんでください。

項目名	ここに入力すると自動的に報告書が完成します。	入力要領
授業改善プロジェクト 報告書原稿作成ツール KochiEIGOII Ver.1	作業したデータを保存	プレビューで確認(印刷)
個人情報		
受講番号		半角文字に限る
学校名		正式の名称。設置者は不要。
氏名		姓・名間に全角で1スペース
研究対象		対象学年等を記入。
生徒数		研究対象の生徒数
単位数		中学校の場合は週あたりの時間数
研究の科目名		中学校の場合は学年
教科書名		教科書名
クラスの様子・特徴		
問題の確定		

STEP 3 報告書原稿の推敲・校正

以下のような理由から、報告書の原稿は、確実に推敲・校正を行う必要があります。

第三者の意見を聞くことで、極端に主観的になったり、独善に陥らないようにする。

論理展開などをより良いものにする。

個人を特定できるような記述や客観性を欠くような記述に留意する必要がある。

STEP 4 報告会用報告書の準備

以下のより、報告会に持参する報告書を準備してください。

- | | |
|-----------------------------|----|
| (1) メンター提出用 (A4版) | 2部 |
| (2) ポスターセッション用 (A3版に拡大したもの) | 1部 |
- ポスターセッションの時に掲示するものです。

ポートフォリオ CHECK

成果と課題 (様式6)

課題4 報告書用原稿 (様式7)

Action Research Navigator 10

報告・共有

日 程

進行説明	13:30～13:40
ポスターセッション	
1ラウンド	13:40～14:05
2ラウンド	14:10～14:35
3ラウンド	14:40～15:05
リサーチグループ別協議	15:20～16:00
まとめ 佐野正之先生	16:00～16:45
閉講式	16:45～17:00

報告会の進め方

参加者全員でお互いの成果と課題を共有するため、「ポスターセッション」形式で行います。

ポスターセッションでは、ポートフォリオを活用して発表しましょう。

他に生徒の作品、授業のビデオ（ビデオカメラの液晶画面で十分）などがあると、内容が具体的に分かって、良い発表になります。

発表にあたっては、「参加者のルール」を守ってください。

・ Reporters 報告者のルール

以下の内容をストーリーテラーとして、時系列に沿って、自分の言葉で正直に分かりやすく伝える。

- 1 自分の授業の実践内容
 - 2 教師側・学習者側に生じたこと
 - 3 教師が考えたこと、感じたこと
 - 4 実践の向上のために参考にした文献やアドバイス等
- ・ 自分は一人称「私」で、学習者固有名（仮名）で呼ぶ。
 - ・ 上手くいかなかったこと、失敗、落ち込み等も隠さず報告する。
 - ・ 質問やそれに対する答えが、参加者全員に共有されるように気を配る。

Audience 聴衆のルール

- ・ 教員経験の長さに関わらず「参加者全員が発展途上の教師である」という考えを心に留めておく。
- ・ 実践の結果よりもそのプロセスに注目する。
- ・ 一つの正答を求めない。
- ・ 見解や意見の論争を避ける。
- ・ 似たような体験をしたことがあるなら、その時の体験談を報告者や他の聴衆に語る。
- ・ 励ましや次の実践へとつながるアドバイスを、報告者に積極的に与える。
- ・ 質問したり自分の体験を語ったりアドバイス・励ましを与えたりするときは、穏やかな口調で微笑みを絶やさずに。

参考文献

- 佐野正之(2000) 『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店
佐野正之(2005) 『はじめてのアクション・リサーチ』大修館書店
J.C. Richard 他著、新里眞男訳(2000) 『英語教育のアクション・リサーチ(*Reflective Teaching in Second Language Classrooms*)』研究社
横溝紳一郎(2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社
横溝紳一郎(1999) 「アクション・リサーチとティーチング・ポートフォリオ：現職教師の自己成長のために」 *The Language Teacher* 23:12)
Jack C. Richard and David Nunan (1990) *Second Language Teacher Education*, Cambridge University Press
Jack C. Richard (1998) *Beyond Training*, Cambridge University Press.
David Nunan and Clarice Lamb (1996) *The Self-Directed Teacher*, Cambridge University Press.
Peter James (2001) *Teachers in Action*, Cambridge Teacher Training and Development.
Pamela D. Tucker et al (2002) *Handbook on Teacher Portofolios*, Eye on Education.